

最強の歴戦ガンブレードマスターに平穏な生活を…！

おくと

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

戦いの末、子供かばって死んだ。男は、平穏な生活を送るために転生するが…

目次

N O .	1	転生	1
N O .	2	大物ルーキー	4
N O .	3	キャベツ栽培	15
N O .	4	カズマと合流　そして魔女	20
N O .	6	調査完了で、……ええ……な件	29
N O .	7	ポジション騒動	41

## No. 1 転生

俺の名は レン・ヴァーフアイト

享年53

若い頃ころから傭兵をして経験をつみ30でガンブレードマスターになったその後いろんな戦争とかに巻き込まれ後進に務めるため学園の教師になった数年 俺は死んだ…死因は刺し違い目が覚め手を見ると…若返っていたらしい

レン「…どうなってんだ？服装は死んだときのまま」

黒いアイディアル・ボディガードコートだ

レン「どうなってんだ！」

「落ち着いてください」

レンは声をする方を向く椅子に座った女性がいた

レン「誰だ？あんたは？」

？「とりあえず座りなよ」

レンはとりあえず座る

？「それでは自己紹介しよう…私は女神の…て、」

するがレンはスマホをいじりだす

？「人が話している時にスマホはいじらない！」

と取り上げられる女神となのる女性はスマホに書かれた投稿をみる

女神と自称する頭のイカれた女に拉致られた上に若返らせられた誰か助けてくださ…

？「…何これ？」

レン「ハ●シユタグだ 事実を書いたまでだ…そもそも俺は神なんてもの信じねえし」

？「そうなんです…とりあえず私はーといいます」

レン「ああ…強行していくスタイルね わかりません」

？「とにかく あなたには2つ道があります」

レン「？」

？「このまま成仏するか…異世界に転生するかです」

レン「…なあ…その前にいいか？」  
？「？」

レン「おれの生徒は生き延びているか？俺はあいつらを守れたのか？」

？「…はい…貴方が庇った子も全員」

レン「そうか…ふむ…あんた女神なんだろう？」

？「え、ええ」

レン「そいつらに伝言頼めるか？」

？「大丈夫ですが、」

レン「そうか…なにか書くものをくれ」

女神は紙と鉛筆をわたすとレンは手紙を書く

レン「これでいい 死後届くようになっていたという設定で頼むぞ」

と女神に手紙をわたす

？「大事な子たちなんですね」

レン「ああ…俺には嫁さんも子供もいなかったからなというか、いろいろあつて婚期逃した…まあ…転生する方向でいいか…あの世に行っても暇だし」

？「ではそうしますね あ！あと特典がつくので」

レン「特典？」

？「はい 最強の武器とか防具とか」

レン「ふくん…それ以外でもいいか？」

？「構いませんが」

レン「じゃあ俺の愛用品で」

？「ガンブレードとバイク、あの銃2つとリローディングツールですか？」

レン「御明答〜！できる？」

？「でも一つしか行けないと上が決めてるんです…」

レン「おい俺は愛用品と行っただけで一つと入ってないぞ？」

？「(この人せこい！)」

レン「それに向こうだと材料とかあんのか？」

? 「ないですね…」

レン 「だろ？」

? 「愛用品にしますね」

そうすると愛用品がいくつか出てくる

バイクの脇にガンブレードをしまうラッチがあり前輪はタイヤが2つ後輪は3つとなっている。そして後ろにリローディングツールをつむ 銃はリボルバーで胸のホルスターにしまう

レン 「頼む」

女神は両手をレンに立っている床にかざした。すると床には青い魔法陣が映し出され、レンの周りが半透明な青い壁で覆われる。

? 「君が魔王を討ち取る勇者となれることを祈っているよ……君の異世界冒険者生活に祝福を」

レン 「短い間だが、世話になったな」

女神は笑い そしてレンは天へと昇っていく

レン 「それにしてもバイクごと中に浮かぶのは少し違和感あるな  
(正直これ、平穩には必要ないと思うが…魔王か…ならいるか…) はあ  
ゝ また死合うのかあゝ」

## No. 2 大物ルーキー

レン「あ?..」

と気づけば街の中周りの建物は赤屋根に茶色いレンガ

レン「(懐かしいな…故郷もこんなだったけ…)」

と感傷に浸る…カスタムしたバイクのハーデイーデイトナにまたがりながら来たがバイクを知らないこの世界の人たちはバイクに乗るレンをまじまじと見る

レン「とりまここ離れるか…すまない…ギルドはどこだ?」

町人「こ、この先を左折したさきだ」

町人は狼狽しながら言う

レン「そうか…礼を言う」

といって走らせるそうしてギルドへ

「こんにちわー。どういったご用件で?..」

レンはカウンターに歩み寄り

レン「冒険者になるために登録を…」

「冒険者志望の方ですね。それでは、登録手数料の千エリスをお支払い願えますか?..」

レン「…そうか…(とえど金はないどうするか…うん?)」

レンはポケットを弄るとなにかのメダルがでる

レン「これでいいか?..」

「はい…」

レンはこれで無一文となる

レン「(まあ何かと向こうでも金欠だったな…いや…ただ巻き上げられてただけか?)」

「ではまず、この冒険者カードについてご説明します」

受付嬢は古びた紙に見えるカードを手に受付から出し、レンにわたす

「このカードは、冒険者の身分証明書となるカードです。冒険者には必ずこれを所持してもらおうよう義務付けられています。このカードがなければクエストを受けることはできません。またこれには、冒険

者カードには様々な情報が記載されており、冒険者様の名前からレベル、職業、ステータス、所持スキルポイント、習得スキル、習得可能なスキル、冒険者になってからの経過日数、過去に討伐したモンスターの種族、数などが自動的に更新され、表示されます。そして偽造は禁止しておりますのでご注意ください。また、紛失された場合はギルドに申し出てください。お金はかかりますが、再発行いたします」

レン「これは、便利だな」

「全てのモンスターには魂が宿っており、人はモンスターを倒せばその魂を吸収し続けます。そして、ある一定の量まで吸収したところで、人は急激に成長することがあります。これを俗にレベルアップと言います。レベルを上げるとスキルポイントがたまっていき、こちらを消費することで新たなスキルを覚えることができます。なお、素質次第ではレベルの時点で多くのスキルポイントを取得できません。新たにスキルを獲得する際には、冒険者カードを操作し『習得可能スキル一覧』に出ているスキルを押してください……ぼ、冒険者カードについての説明は以上です」

レン「…（わけがわからん…）」

「……えーっと……では、まずこちらの書類に必要事項を記入していただけますか？」

レンはとりあえず必要事項を書く

「はい、お名前は……レン様ですね。ではお次に、こちらの水晶に手をかざしていただけますか？」

受付嬢は、カウンターに置かれていた水晶の下に冒険者カードを置いた。綺麗な水色に輝く水晶の周りには、見たこともない機械が取り付けられている。

レン「これに手をかざすのか？」

「はい、そうすればステータスの測定ができます」

レンが手をかざすと水晶はひとりでに輝き出し、周りについていた器械が動き始めた。そして、下に置いていた冒険者カードにレーザーを放ち始め、この世界の文字を記していく。

カードには、自身のなまえとステータスがレーザーにより記され続



けて文字を記し始める。

「なっ！なんですか!?!このステータスは?!」

レン「?!」

すると突然、受付嬢が大声を出して驚いた。彼女はカツと目を見開き、食い入るように作成途中の冒険者カードを見つめている。ギルド内にいた冒険者達がカウンターへ顔を向けると、何事かと集まってきた。

「どうした?どうした?」

「何か問題でもあったか?」

「問題なんてもんじゃないですよ!筋力 魔力、知力、器用、俊敏性……運のステータス全てが、大幅に平均値を超えています!特に 筋力 魔力、知力、器用ていうかこんな極めて高い数値です。こんな初めて見ました! それに見たこともないスキルがいくつもあります!」

レン「…」

「マジかよ! こりやスゲエな!」

「すげえのがきたな」

「魔王討伐の日は近いかもな!」

「このステータスなら、最初から上位職は勿論のこと、どんな職業にだってなれますよ! アークプリースト、アークウィザード、クルセイダーだって!」

レン「そうか…とりあえず落ち着いてくれ」

「申し訳ありません つい」

あまりの高ステータスを見て興奮を抑えきれないでいた

レン「職業なんだが」

「はい」

レン「…ガンブレイドマスターで頼む」

「ガンブレイドマスターですね! タンクの上位職でありガンブレイカーのそう上、強力な技で立ちで立ち回り仲間を守りながらガンブレードで切り伏せるスペシャリスト! 装備もあるんですか?」

レン「ああここにな」

と背負ったガンブレードをみせる

そうして 登録を終える

レン「…クエストは受けられるか?」

「はい 討伐でしたら これなんかどうですか?」

(3日でジャイアントトード討伐)

レン「じゃあそれで」

「わかりました パーティーはどうなさいますか?」

レン「必要ない」

「ええっ?! ソロで行かれるのですか!?!」

レン「ああ」

周りにいた冒険者達も驚愕し、中には呆れている者もいた。

「オイオイあんちゃん…:素質が高いつて知って舞い上がる気持ちはわかるけど、そいつは流石に身の程知らずつてヤツだぜ?」

「ここは、まずは仲間と一緒に行くのがセオリーというもんだぞ?」

「なんなら私達のパーティーくむ?」

レン「悪いが遠慮しておく、いつかは一人でなんとかしないといざつて時に動けなくなる…:それに優秀な先輩方のパーティーメンバーがいると甘えがでる。だから ソロでいい 心配なさってくれ先輩方ありがとうございます」

とやんわり断る

「し、しかしソロは危険では」

レン「ヤバかったら逃げる」

「わかりました」

そういつてクエストを発行する

そうして草原へ

レン「でかいカエルだと聞いたが…:本当にでかいな…:」

ガンブレードを肩に担いだレンの前にはでかいカエルことジャイアントトードがいるジャイアントトードはレンを丸呑みにしようと舌を伸ばすがレンは、それを紙一重で躲す

レン「温厚であるが繁殖期はあるのか、こいつに恨みはないが…:あれ試すか」

とガンブレードを構える

(連続剣！)

効果…スキル4から6連射できる

レンはジャイアントトードのもとに走ると高速で5回連続で斬りつけると、ジャイアントトードは倒れる

レン「よし？」

(レベルアップしました！連続剣を覚えました。)

※連続剣Ⅱコンボ

レン「へえ、使った技がスキルとして完全に覚えるのかフム…

ジャイアントトードはまだいるな…とりあえず一個ずつ確実にやるか！」

(キーンエッジを覚えました！)

効果…対象に小威力の物理攻撃

レン「次だ！」

(ノー・マシーを覚えました！)

効果…一定時間、自身の与ダメージを20%上昇

レン「よし！次はバフだ！」

(ブルータルシエルを覚えました！)

効果…自身のHPを回復し、自身に一定量のダメージを防ぐバリアを張る。また回復量の100%分のダメージを軽減する。

レン「バフは大事！絶対！」

(カモフラージュを覚えました！)

効果…一定時間、自身の受け流し発動率を50%上昇させ、かつ自身の被ダメージを10%軽減させる。

レン「これは必要だ！…多分…使った記憶が曖昧だ」

(デーモンスライスを覚えました！)

効果…周囲の敵に向け小威力の範囲物理攻撃

レン「丁度いい 全体攻撃だ！」

(ロイヤルガードを覚えました！)

レン「こんなのあったっけ？…ん？なんか寒けするなこの効果」

効果…戦闘中の敵から自身に向けられる敵視を非常に大きく上昇

させる。

(サンダーバレット ウインドバレット ライトバレット フレームバレットを覚えました!)

効果…対象に属性を付与した遠隔物理攻撃

レン「属性攻撃か牽制に使えるな」

(デンジャーゾーンを覚えました!)

効果…対象に中威力の物理攻撃

レン「えくと 何これ？」

(ソリッドバレルを覚えました!)

効果…対象に小威力の物理攻撃 コンボ時ダメージ増加

レン「よく使ったな」

(バーストストライクを覚えました)

効果…対象に中威力の物理攻撃

レン「覚えには覚えたような記憶があつたかな？」

(ネビュラを覚えました!)

効果…自身のんだダメージ30%軽減

レン「…???これはわからん！」

(デーモンスローターを覚えました!)

効果…自身の周囲の敵に小威力の範囲物理攻撃 コンボ時ダメージ増加

ジ増加

レン「こんなのがあつたんだ」

(オーロラを覚えました!)

効果…対象の体力を継続回復させる

レン「こいつにはよく助けられたな」

(ポーライドを覚えました!)

効果…自身のHPを1にするが、効果中、自身への一部を除くすべてのダメージを無効化する。

レン「これとオーロラ乱用したなあ〜若い頃…あ 今も若いのか…」

(ソニックブレイクを覚えました!)

効果…対象に中威力の物理攻撃また、継続ダメージを付与する。

レン 「面倒臭いとき使ったな」

(ラフデイベインドを覚えました！)

効果…対象に飛び掛かりつつ小威力の物理攻撃。

レン 「不意打ちにはこれだ！」

(ビートフアングを覚えました！)

効果…対象に中威力の物理攻撃。

レン 「こんなの使ったことねえ」

(サベツジクロウを覚えました！)

効果対象に中威力の物理攻撃

レン 「連続剣に混ぜたらいいかもな」

(ウイケツドタロンを覚えました！)

効果…対象に高威力の物理攻撃。

レン 「これも混ぜるか」

(バウシヨックを覚えました！)

効果…自身の周囲の敵に小威力の範囲物理攻撃 継続ダメージを

付与

レン 「ちようどいい」

(冷刃を覚えました！)

効果…氷属性の高威力遠距離攻撃

レン 「垢まみれの技が来たなこれからまたお世話になるな」

(ハート・オブ・ライトを覚えました！)

効果…自身と周囲のパーティメンバーの被魔法ダメージを10%

軽減させる。

レン (魔法系のバフかあ)

(ハート・オブ・ストーンを覚えました！)

レン 「囷を作れるな組み合わせればうん擬似的タンクをつくれる

か？」

(コンティニュエーションを覚えました)

効果…対象にへの追撃攻撃を行う。

レン 「連続剣を連続させるのか？これは？」

(ジャギユラーリップを覚えました！)

効果…対象に小威力の物理攻撃。

レン「これも連続剣限定かあ」

(アブドメンテアーを覚えました！)

効果…対象に小威力の物理攻撃。

レン「これも…てかまた？」

(アイガウジを覚えました！)

効果…対象に小威力の物理攻撃。

レン「また?!うーん使わないなかぶるやつは…」

(フェイテッドサークルを覚えました！)

効果…自身を中心に周囲の敵に中威力の範囲物理攻撃。

レン「不意打ちされたか…包囲されたときに突破するのにつかつたなあ」

(ブラッドソイルを覚えました！)

効果…連続剣の回数を上げる

レン「これはいい！」

(ブラステイングゾーンを覚えました！)

効果…全体に高威力物理攻撃

レン「こいつは切り札の一つだったな！」

(アルテマバレットを覚えました！)

効果…無属性高威力物理攻撃

レン「こいつは…やめておこう」

(エンド オブ ハート を覚えました)

効果…敵単体に無属性超極大物理攻撃

(リボルバーマキシマムを覚えました！)

効果…敵単体に炎属性の極大威力攻撃

(ブラステイングドライブ覚えました！)

攻撃…敵全体に氷属性の極大威力遠距離効果

レン「まだまだ！もつとだ！」

3日後

レン「これで全盛期の技はコンプリートしたか…三日も寝ずにやりやできるか でもこれはバンバン出せないなあ…これ全部うった

ら間違えなく死か まだ体はガキだから無理は禁物か…何匹倒した  
んだらうか?ん」

「ジャイアントトードの屍が多く転がっている

レン「やりすぎたか?とりあえずギルドに戻るか…」

そういつてハーディィデイトナの脇のガンブレード用の鞆がついたラッチにガンブレードをしまい、ハーディィデイトナにまたがりギルドに向かう

レン「とりあえずついたが(視線が…)」

そういつてガンブレードを抜き鍵をとる

盗まれる心配こそないなぜならこいつを動かすには魔力が必要であるからだが、用心に越したことはない

ギルドにもどると

「おおお!おかえりあんちゃん」

「その様子だと一匹もむりだったか?」

レンはまっすぐ受付嬢のいるカウンターへ

レン「報酬を頼めるか?」

そういつてギルドカードを差し出す

「分かりました」

そういつてカードをみる

「?!150?!」

ギルドにいた人間全員驚愕する

レン「…」

「嘘だろおっ?!」

「インチキじゃないのか?!」

レン「三日間寝ずにやったんだ そのくらい いつてるだろ?」

「三日間でそんなにいくのか?!」

レン「それで?報酬の方なのだが?」

「あの 実は討伐したモンスターの買取金額も含まれておりまして、回収をギルドが終えるまでは、報酬の方をお渡しすることができません」

レン「そんなのか」

受付嬢「そうなんです」

レン&受付嬢「…」（バン！）

レン「それを先に言え……！！」

レンはカウンターに手を叩きつける叩きつけられた部分はレンの手のひら型に凹む

受付嬢「も、申し訳ありません！」

レンは不機嫌に

レン「入ったら教えろ」

と言い残しギルドをあとにする

レン「どうしたのか…」

と頭をかく 現在無一文どうしたものか…

レン「（とりあえず宿に行つて交渉だ！）」

そういつてハーデーⅡデイトナに跨り宿へ

宿を探すうちに夕方になってしまった

宿主「いらっしやい」

レン「とまりたいんだが」

宿主「あいよ 30エリスだ」

レン「すまないが今際払えない」

レンはそう言うのとギルドカードをみせる

宿主「なるほど…結構な額はあるのかい？」

レン「ああ…泊めてくれたら3倍の90エリスです…」

宿主「…」

レン「…」

宿主「わかった、今回は特別だ」

レン「悪いな」

そういつて部屋へ移動する

レン「とりあえず寢床はいいとして（グウー）飯だな…」

レンは体中のポケットを弄る、

レン「！これは!？」

飴玉とビーフジャーキー2枚

レン「これでのりきれと…?!（グウー）是非もなし！（とりあえ



ず人かけらずつ食って噛みまくるそんでもって満腹中枢を…!」  
と食べきる

レン「こんなもんで腹が膨れるわけないわな…(グウ…)…寝よ…」  
そうしてふて寝する

## No. 3 キャベツ栽培

俺の名は

レン ヴァーフアイト (18才)

職業 ガンブレイカー

とりあえず…宿住まいしている 例の3倍の支払いの件は済んで、一応棚ぼたでちよいリツチであるが…一番耐えれないことがある…この前のいくつかのクエストで、ドラゴンと巨大なサンドワームを倒した…それが原因でどこかの誰かが広めたか知らないが獅子奮迅のような様であったことから

「ようー黒獅子」

「黒獅子さんこの前のクエストありがとよ」

「黒獅子俺の代わりにorz (無言パンチ)」

レンには(漆黒の獅子)という2つ名ができたことにより縮まって、黒獅子と呼ばれる

成りたて冒険者「黒獅子さん!あの最初のクエストは…」

レン「暴れうさぎにしとけ…そろそろ発情期だから気が立ってるしさあまりむれることもないからいいぞ」

※暴れうさぎてなに? 角のあるうさぎです

成りたて冒険者「わかりました!」

レン「ああくちゃんとレンで名前あんのにく(恥ずかしい)」  
とギルドの椅子に座り頭をつける すると前席に女性が座る

レン「クリスかあ?」

クリス「あつたりよくわかったねえ」

レン「嫌でもわかるお前のまいた噂のせいでちゃんと呼ばれなくなっただぞ?」

クリス「あははははくその件に関してはごめんね」

レン「…(|||||)」

クリス「そ そうだ!今日お願いがあってきたんだ!」

レン「これ以上俺をおとしめる気か?」

クリス「そんなことはないよ」

レン「あーそ…」

クリス「クエストのパーティー組みたいのうちタンク職いなくて」

レン「ほか当たれ」

クリス「いるにはいるけど…その…」

レン「…ひどいのか？」

クリス「そうじゃないんだけど…その痛めつけられる…」

レン「…わかった！あいつか！まあとりまクエストの件リヨっす！

そーういや…この前下着取られてたけどあれは誰だ？」

時は少し前に遡る。

クリス「カズマてひと 彼となんかあったの？」

レン「いや、少し似てるなと思って」

すると招集の警鐘がなる

緊急クエストが発行された

レン「なんだ？」

クリス「緊急クエストの招集だよ」

レン「緊急クエスト？ 襲撃か!？」

クリス「言っただけだったっけ？ キャベツよ」

レン「…は？」

クリス「ほら行くよ！」

レンはクリスに連れられアクセルの正面ゲートへ

木でできたカゴを何故か抱えている上から下まで青い女と冒険者

たちがいた

レン「キャベツなんてどこにもい…」

クリス「上だよ」

レン「バカ言え…キャベツが飛ぶわけ…飛んでる!?!だと!」

見上げると雲のように見えていたのは、敵の群衆、それらは虫のよう  
に舞いながら、こちらへ向かってきていた緑色のモンスター。

「キャベツキャベツキャベツ…」

カズマ「なんじゃこりゃああああああああああああああっ!？」

レン「なんで空飛んでんだよ…キャベツがよ!バ●スしたらあれお  
ちるか?」

冒険者「収穫だあああああああああああああああああああああああ  
ああつ！」

冒険者「マヨネーズ持ってこーい！」

空飛ぶキャベツ達が目前に冒険者達は大声を上げて一斉にキャベツ目掛けて走り出した。

カズマ「どっかで見えた光景だなあくコミケ？」

受付嬢「みなさーん！ 今年もキャベツ収穫の時期がやってまいりましたー！ 今年のキャベツは出来がよく、一玉の収穫につき一万エリスです！ できるだけ多くのキャベツを捕まえ、この檻におさめてください！」

冒険者たち「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おとおおつ！」

カズマ「いやちよつと待って!? なんでキャベツが飛んでんの!?!」  
青い女「カズマ、この世界のキャベツは……飛ぶわ。味が濃縮してきて収穫の時期が近づくと、簡単に食われてたまるかとばかりに……街や草原を疾走する彼らは大陸を渡り、海を越え、最後には人知れぬ秘境の奥で、誰にも食べられず、ひっそりと息を引き取ると言われているわ。それならば、私達は彼らを一玉でも多く捕まえて、美味しく食べてあげようってことよ！」

カズマ「……俺、もう帰って寝てもいいかな？」

レン「一個1万なら……50こで……よしやるか……」

レンは城壁にあがると人間とは思えない跳躍力で城壁から飛んでいった。

カズマ「なんでっ！ 俺がつ！ こんなことをつ！」

ジャージ姿の新米冒険者であるカズマは、文句を言いながらもキャベツを回収していた。

「おい！ あれ！」

「オイ！ あそこにいるのって……！」

「ま、間違いないねえ！ 黒獅子だ！」

「(やっぱり……！)」

レン空中を蹴るとそれなりの高度へキャベツがレンを囲むそして

トリガーを3回引く

レン「プラスチック：ドライブ！」

周りの大量のキャベツが一気に氷つき次々地に落ちる

レン「クリース！回収よろ！」

と叫ぶ

クリス「がってん！」

カズマは一時的に腕をとめて、空中でキャベツを凍結させ落として  
いるレンのその姿がよく見える位置に移り観察する。

カズマ「(……かなりのイケメン……！)」

現にギルド内でも女性冒険者にも人気がある……

カズマ「(めぐみんの爆裂が使えたらな……)」

レンに直撃させてやりたいとカズマは思う。

レンのもつガンブレードをチート武器なのかとカズマは推測する。

カズマ「本当せこいな……」

めぐみん「カズマ！ 噂になっていた冒険者が！」

カズマ「ああ、俺も初めて見た。どうせチーターだろ……」

レン「さて……デモンストレーションはこの辺しとくか……ここからは  
確実に落とすか……冷刃……」

レンは自身に次々向かって来るキャベツを避けと冷刃でキャベツ  
を凍結させ落とす

レン「せい！クリス！落ちたぞ！」

クリス「はいはい」

攻撃するたびにトリガーを引きそして回るリボルバー機構そして  
ハンマーが下りるたびに青く光る刀身そして卓越した動き攻撃性の  
高いキャベツが何匹も彼に向かって突撃するも……彼は表情を崩さず  
に一匹一匹確実に対処する

カズマ「すげえ……ん？いた！なんだ？キャベツ？」

上から凍ったキャベツが落ちてきた

レン「すまん！詫びにお前の周りに落ちてるキャベツ持っていないか  
ら」

カズマ「お おう……」

チート武器でもなく…早く…そして強い…おそらく彼の剣さばきは誰が見ても見惚れるだろう。そうしてキャベツたちがいなくなるのを確認すると、一気に滞空していた高さから急降下して下りる。そこにクリスが近づく

クリス「お疲れ〜」

レン「そつちも…換金のほう頼む45%くらい持っていていいから」

クリス「わかった」

レン「なんだろう…俺の第六感が逃げろと叫んでいる…」

レンは後ろを見る二人のもとに何故かボロボロになっっている鎧を纏った金髪の女性がこちらにやってくるのが見えた。

レン「あと任せた!」

クリス「ちよっ!レン!ダクネス!?!」

レン逃走!

レンは逃げ切るとふと思う

レン「あー肉●商店の牛カルビ丼食いて〜」

スキル 「天上天下唯我独尊」を覚えました

効果 すべてのmpを消費して上位スキル連発…

デメリット mpが底を尽きると自動的に睡眠状態へ移行する

## No. 4 カズマと合流 そして魔女

レンはダクネスから逃走後

ギルドマスターに呼び出された

ギルマス「君にクエストの依頼をしたい」

レン「なんの？」

ギルマス「砂漠地帯の遺跡の調査に行ってもらいたい」

レン「墓泥棒ですかい？」

ギルマス「もつとオブラートにつつめんのか？」

レン「同行者といんすか？ワン〇〇スのロ〇ンとか？」

ギルマス「いないけどというか誰なんだいそれ？」

レン「じゃあ同行者は？」

ギルマス「盗賊職の、クリスに任せてある」

レン「りよす」

そういつて一通り話をつけて酒場へ行くとクリスがいた

クリス「遺跡調査の話？」

レン「ああ：明日から頼む女神様…」

クリス「!？」

レンは笑いウインクする

レン「アーティファクトの回収お疲れ様」

クリス「なくんだ：バレれてましたか」

レン「転生前であつた女神と気配が見せたからなピンと来たんだま

俺はそのことでお前にどうこうしろという気はないけどな」

そう言つてレンは煙管をふかす

クリス「レンで、喫煙家なんだね」

レン「いや：これは、薬だ喘息持ちでねその吸引が煙管というだけだ」

クリス「へー」

レン「今は収まっているがいつ再発するかわからんからな：それでこそ戦闘中なら尚更だ：迷惑なら申し訳ない」

そういつて口から水蒸気の煙を吹き出す

クリス「いいや：匂いはしないから普通かな」

レン「まあ：しないようにこっちの世界の物で調合したからな…」

クリス「以外に器用だね」

レン「なあ：俺の娘は：どうなったんだ…」

クリス「貴方の跡を引き継いでガンブレードマスターになったわよ」

レン「！そうか：そうか」

レンは手で目元を隠す

ダクネス「クリスじゃないか」

クリス「あつ、カズマ。それにめぐみんとアクアさんも」

レン「知りあいか？」

クリス「うん、茶髪の子がカズマで、魔法使いの子がめぐみん。残る一人がアクアさん」

クリス「立ち話もなんだし、夕食を食べながら再開しよつか。よかったですら一緒にどう？」

レン「構わんよ」

酒場の隅にあった席に座る

ギルド職員「お待たせしましたー！ シュワシュワ四つにオレンジジュース一つ、お冷一つです！ ごゆっくりどうぞー！」

クリス「じゃあカズマ君。話の続きをしたいところだけど…」

アクアとめぐみんも気になるのか、レンを見つめていた。

めぐみん「知り合いましたのですか？」

クリス「最近会ったんだ」

レン「まあ：こっちに来たとき頼らせてもらった」

クリス「それでよし。じゃあこの件はここまでにして、そろそろ紹介するよ。彼の名前はレン。漆黒の獅子称される程の腕の持ち主よ」

レン「紹介に預かったガンブレイカーのレンだ：黒獅子と呼ぶなよ…恥ずいから」

めぐみん「おおっ…！」

めぐみんは赤い目をキラキラと輝かせる。そこで、二人の関係が気



になったカズマが自ら質問した。

カズマ「クリスと仲間なんですか？」

レン「違う。あくまで協力関係。」

クリス「というわけだから、皆さん自己紹介よろしくっ」

ダクネス「私はダクネス。アクセルの街に住む冒険者で、カズマのパーティーメンバーだ。職業はクルセイダーしている。」

カズマ「何サラツと仲間になつてんの!?!? 認めた覚えないんだけど!?!」

アクア「アンタまだ反対してたの? 私はもう仲間に迎える気でいたんだけど?」

めぐみん「私もです。護衛担当の方がいれば、私も爆裂魔法が撃てますから。ダクネス、よろしくお願いします」

ダクネス「防御には自信がある。盾役なら望むところだ。何なら匣にして私をモンスター軍団の中に放置してくれても構わない。ああ……想像しただけで武者震いが……」

レン「(マゾヒスト……)」

めぐみん「次は私が行きましょうっ! 我が名はめぐみん! アークウィザードを生業とする紅魔族であり、地に立つ有象無象を塵と化する史上最強の『爆裂魔法』を操る、この街随一の魔法使い! この世を支配せしめんとする魔王を討つべく、横にいるカズマと血の盟約を交わした冒険者である!」

レン「(病人か……) 紅魔族てたしか……生まれつき高い魔力と知性を持つている人間で、一定の年齢になると魔法の修行を始めるぐらい魔法に長けた種族か?」

めぐみん「おおっ! よくご存知ですね!」

レン「一応……もと歴史学者なんでね」

めぐみん「貴方からは、私と近い物を感じます。いや、断言します! 貴方は、こちら側の者だと!」

レン「……そうか……俺はそうと思わないよ……」

と冷めた目でめぐみんをみる

めぐみん「いえ! 貴方はこちらが……」

レン「次頼む」

レンはめぐみんをスルーする

カズマ「あ、…えっと…佐藤和真です。こんなナリですけど、魔王倒すために頑張ってる冒険者です…はい」

めぐみん「自己紹介はもつと大胆にしなければ。そう！ 私のように！」

カズマ「君はちょっと黙っててくれるかなー？」

レン「君からは俺と同じく苦労人の匂いがするよ…」

カズマ「あ…察してくれてありがとうございます。」

アクア「じゃあ最後は私！私はアクア！ アクシズ教徒が崇める水の女神、アクア様よ！」

レン「？アクシズであれか？大佐が地球に落とそうとあれか？」

(ガタガタ)

アクア「ちがうわよ！」

レン「ア●ロ！地球上に残った人類などは、地上の蚤だということが何故分からのだ!!」

カズマ「やめろ！てなんでしてんだよ！」

レン「なーんだ…そっちのアクシズじゃないのか…」

カズマ「はい…そんなもってこいつは…女神を自称しているカワイソーな子なんです。自分が女神だと思い込んでるイタイ子なんです……そつとしてやってください」

アクア「ちよつとカズマ！ 誰が自称女神よ!? 私は正真正銘女神様なの！まあいいわ。それよりレン！貴方の剣技、中々のものだったわ。で、私から一つ提案があるの」

レン「仲間になるのはお断りだ…駄女神」

アクア「まだ何も言っていないじゃないのよおおおおっ!?てか！サラツといま駄女神で、言わなかった！」

レン「その様子だと大分迷惑かけているようだな疫病駄女神…カズマも大変だな」

アクア「疫病…駄女神!!」

アクアは激昂するがレンにその発言を片っ端から論破した結果



アクア「はああああああアアアッ!!!」

レン「まあそんなところだろうな」

クリス「わかったの」

レン「まあな…経験値稼ぎになるかと思っただけ見分けず斬ったからな

…

めぐみん「あの一、レンさんのステータスを見せてもらおうことって  
できますか?」

レン「いいぜ」

カズマ、めぐみん、ダクネスの三人はカードを覗き込み驚嘆した。

めぐみん「な、なんですかこの数値は!? デタラメにも程がありませんよ!」

ダクネス「ここまで高いと、特別指定モンスターを討伐できたのも  
頷ける」

カズマ「俺もこんな数値を叩き出したかったなあ」

レン「俺は昔傭兵もどきしてたからその時の経験が出てると思う  
ぜ」

めぐみん「!スキル…「召喚獣」?!」

レン「この前契約してきた」

カズマ「何召喚できんすか?」

レン「アレキサンダー、シヴァ、イフリート、カーバンクル、バハ  
ムートかな」

カズマ「マジすか!羨ましいす…」

レン「…「召喚」…カーバンクル」

すると地面に穴が空くと額に赤い水晶を持つ狐と兎が交じった小  
動物が現れる

カーバンクル「なあーに〜?レン」

めぐみん「すごいですよ!幻の召喚獣カーバンクルですよ!可愛い  
ですね!」

カズマ「始めてみたわ…」

カーバンクル「誰これ?」

レン「俺の知り合いなんでカズマと…契約してくれないか?」

カズマ「え？」

カーバンクル「いいけど…ステータスとか行けるのかな？」

レン「冒険者だ」

カーバンクル「じゃあ大丈夫そうだね」

カズマ「え？いんすか？そんな！」

レン「本当はカズマは他のやつやってほしいがあいにくこいつしか人と友好的じゃないだ…ごめんな」

カズマ「全然いいですよ！」

そうして契約を結ぶ

カズマ「これで俺も召喚できるのかあ〜！ありがとうございます！レンさん！」

レン「いいよ いいよ カーバンクル」

カーバンクル「なにいく？」

レン「何か食ってくか？」

カーバンクル「うん フルーツお願いできる？」

レン「おう」

カーバンクルは頼んだフルーツ盛りを食べ尽くすと帰っていった。めぐみんとダクネスは召喚契約は無理でした。理由、カーバンクルと契約するのにステータス不足

レン「カズマ君少し表で話さないかい？」

カズマ「？」

二人は酒場の外へ

レン「…お前極東か？」

カズマ「極東…?!え？レンさんも？」

レン「ああ転生者だと言っても少し違うがな」

カズマ「？」

レン「俺は53で死んだ…だが、こちらに来たとき今は19歳」

カズマ「そうなんです…多分ですけど、転生する時に女神様から…特典を選んでくれてって言われませんでした？」

レン「確かに言われたな」

カズマ「じゃ、じゃあ！ その時に選んだのってもしかして……」

レン「たしかにそうだが…お前の期待する武器とは違う、これは前世でずっと使っていた武器で、技はすべて俺が編み出したものだ」

カズマ「(…あれ?)…!ならその武器って、自分の力が全体的にグリーンと上がったりますか?」

レン「そんな性能はない?そんなもんがあればお前にくれてやってみよ」

カズマ「(…あつれー?)」

レン「カズマ君よ…俺の世界では戦いが一般的な世界だったんだよ生きるために修行をしたし、戦争にも行った。それで53まで生きて…」

カズマ「(わかった…この人は…素が強すぎるだ!)」

レンは宿屋に戻る途中

レン「…なんのようだ…気配は消せても…そのドス黒い魔力は消せねえぞ…」

そうして振り向きざまに魔女の首元にガンブレードを突きつける

魔女はレンの首元に杖を突きつける

レン「膠着状態だな…」

魔女「そのようね…」

レン「今日のレンくんはお友達でできたからいい気分なんだよだからあまり無駄な争いはしたくないんだけどな」

魔女「ライオンさん…いや獅子の皮を被ったの狩人(バルバトス)さん」

レンは横薙ぎにガンブレードをふるが避けられ距離を取られる

レン「あんたがなぜそれを知っている?」

魔女「貴方の頭の中読ませてもらったのよ…子どもたちを守って死んだの…嘘みたいね、」

レン「間接的には守ったから嘘じゃねえよ…それに…ガキどもに俺の死ぬところなんざみてほしくないしな…」

魔女「美しい親心ね」

レン「…おまえ…、一体なにもんだ…」

魔女「さあね…また逢いましょう獅子の革を被った悪魔さん」

そうして消えていく…  
レン「あいつ…一体なにもんだ…」

No. 6 調査完了て、…ええく…な件

「砂漠のど真ん中を走るサイドカー付きのバイク

レン「しっかし…防塵したとはいえ…」

「マント着ないといけないとは…」

クリス「仕方ないよ…それにしてもサイドカー作るなんて器用だね」

レン「水の樽積むのにいるな…とと思ってさ」

「そうしてつけたゴーグルの砂を払う

「そうして遺跡につく

レン「エジプトに似てね？」

クリス「そうね…」

レン「遺跡があるということは街があつたと言えるだろう…」

「そうして下車しバイクを虚空倉庫（アイテムボックス）に収納する

レン「しっかしこりやまた便利だな クリスさん」

クリス「ええ、つかつてますよ」

レン「タメでいいのにたく…さて…おかしなことにこの遺跡…索敵魔法がどうにも通らない…なんでだろうな」

クリス「アーティファクトの効果かな」

レン「これはまた嫌な予感がするぜ」

「とガンブレードを肩に担ぎ遺跡にはいる

ガンブレイカー…レンの世界においてガンブレイカーは秘されるものであつたそのため剣技も独特であり、剣技は後継者となる人物かその弟子にしか伝授されない、その中でレンはその黄金期に活躍した人間であり、黒獅子の革を被った狩悪魔（バルバトス）と恐れられていた。

ガンブレード…刀のような刀身に、銃のようなグリップを併せ持つ、奇妙な武器を継承してきた。特殊なシリンドーに魔力を込め、引き金を引くことで一気に開放して、刀身より魔法的效果を発揮する



レンたちな長い回廊を歩く

レン「昔は何があつたんだろうな…考えただけでワクワクする」

クリス「学者みたいだね」

レン「できることなら学者になりたかつたさ…ま それを許さなかつたかな俺のいた時代（世界）ではな…」

クリス「残酷ですね…」

レン「そのおかげで強くなったけどなこの遺跡は誰のための城で何があつたんだ？」

クリス「ここには王国があつてそこに女王がいたけど…」

レン「謀殺されたか…」

クリス「そう！」

レン「…同情する気にはなれんな…先に進むぞ」

クリス「…」

クリスは思い出していた

クリス「バルバトス…ですか？」

女神？「ええ、あれはバルバトスと称されていたその理由はね彼が向こう世界で戦争に参加するたびに相手を一人で全滅また壊滅に追い込む力を有していた。でも最後は彼の力を恐れた味方に犯罪者に仕立てられる、彼に付き添った人間は無事にすんだけど…彼を裏切つた人間と、裏切りを後押しした相手の将軍は死亡したは…彼と一緒にね…」

そんなことを思い出していた

クリス「…」

レン「何ほうけてんだ？先行くぞ」

そうして大広間に出る…

クリスが進もうとするとレンがガンブレードを抜き遮る

レン「クリス下がってろ…何かいる…」

レンは警戒し大広間の段階を降りる

すると上から何が降り立つその姿はまるで人体に無理やり魔物を融合させそして機械でそいつを制御しているようであった

レン「これはこれは…まるで…無理やりされたみたいだな…そんで

…その主もいない…暴走ぎみか…」

クリス「レン！」

レン「くるな！こいつは俺がしとめる」

そうしてトリガーに指をかける

レンは融合モンスターにソニックブレードを発動し手を斬り落とすが、切り落とされた腕はすぐに消滅し直ぐに新しい腕が生える

レン「どうしても暴かれたくない歴史的真相があるみたいだな…」

クリス「どういうこと？」

レン「こいつこの世界のやつじゃねえな…」

クリス「どういうことなの!？」

レン「一つ仮説が浮かんだが後にしよう…（とはいえ、ここは遺跡内部…劣化具合からして大技は出せない）！あれなら！冷刃」

と両手を斬りおとす

融合モンスター「おおおお！おおお！おおお!?!?!？」

クリス「再生しない?」

レン「傷口さえふさしまえばこつちもんだ！速攻で仕留めさせてもらうぞ!!」

そうして融合モンスターにとどめを刺そうとする

（くだらないこと志をいつまで掲げ続けるだい…）

レン「!？」

レンは距離を取る

レン「クリス…きこえたか？」

クリス「なにが？」

レン「そうか…そいつは…一生背負っていくもんだよ！このクソ※

★○▲野郎！」

レンは融合モンスターに急接近しトリガーを6回引く

とガンブレードに氷をまとわせ強力な一閃である冷刃を叩き込むそして首を跳ねた…するとすぐに融合モンスターは消滅した

クリス「終わった?」

レン「なあ…こいつ、この世界の存在じゃないな」

クリス「はい このあとどうしますか?」

クリスは口調が、もどる

レン「先へ進もう　そこに答えがあるはずだ」

「おいまっつてくれ」

クリス&レン「？」

振り返ると猫を模したのかお世辞にも可愛くはないステツキが浮いていた

レン「お前…え!?!名前あんのか？」

セトラ「俺はセトラ　あのバケモンに喰われてたんだ…おたくがたおしてくれたのかい？」

レン「おう…」

クリス「…」

レン「すこしまっつてくれよ」

セトラ「おう！」

レン「あれ…アーティファクトか？」

クリス「いや…あれは違いますね」

レン「そうか…ならいいや…」

レンはセトラをみる

レン「セトラだったか？」

セトラ「おう」

レン「なんで腹の中にいたんだ？」

セトラ「お嬢助けようと人を呼ぼおしたところ…」

レン「言わなくていいさ…だいたいわかった」

セトラ「察してくれてありがとうとよにいちゃん」

レン「おう　で、呼ぼうとしたのは何年前だ…」

セトラ「何年前だって…ついさっきだ」

レン「…申し訳ないがセトラ…お前が食われてから…結構な月日が流れているぞ」

セトラ「!?!本当か！」

レン「ああ…おそらく2000年以上はたってる」

セトラ「…そうか…」

レン「この通りこの宮殿も遺跡になってしまっている。ここの姫さ

んは自殺したことになってる」

セトラ「！それは本当か」

クリス「うん…残念だけど…」

セトラは下を見る

レン「とりあえず行こう…」

セトラ「？」

レン「とりあえず…俺を王の間につれていけ…そして…誓いを果たせ」

セトラ「…ああ…ありがとよ にいちちゃん」

レン「お前の気持ちわからんでもないからだ だから…いくぞ」

クリス「でもそう簡単には行かないみたいだよ」

と指をさすと多数の融合モンスターが現れる

セトラ「またあいつらかよ…」

レン「やれやれ…まあ…いいや…全員…殺してやるよ…たとえ暴かれたくない事実があるとしてもそれを…暴くのが…考古学者の務めだ!!」

とガンブレードの刃をむける。と向かってくる奴らを全員殲滅する

セトラ「兄ちゃんほんと強いな」

レン「まあ…場数は踏んできたからな！」

王の間へ

セトラ「…」

レン「踏ん切りをつけにいこう…」

セトラ「ああ」

そうして階段を上がり、ミイラの棺の前でひざまずく

セトラ「遅れてすまねえな…お嬢…助け連れてきたぜ」

レン「レン・ヴァーフアイト…セトラ殿の救援により馳せ参じました。あなたを襲った者はいませんそして、巢食っていた魔物の退治しました。ご安心してお眠りください」

？「そうですか…」

レン クリス セトラ「はえ？」

レン「いま…、声したよな」

クリス「したね」

セトラ「したな…お嬢の声だ」

レン クリス「呪いか…?!」

レン「…!クリス!開けるぞ!」

クリス「うん!」

そうして棺蓋を開けると中から上品な黒髪が、肩まで伸びて、艶やかな褐色の地肌に類稀なる肢体を有している。女性がいた頭には威厳のあるコブラの冠を頂いている。胸元には煌びやかな装飾がある。胸元は、角度によつては立っているだけでも乳が見えてしまうような状態

レンは速攻で後ろを向く

メナス「私はアマラ王国の女王のメナス…て、なぜ後ろを向いているのですか?」レン・ヴァーファイト

レン「いや…そのなんだ…目のやり…」

そして咳払いすると

レン「貴方と謁見直に謁見するのも恐れ多いので、後ろを向いていてしまいました。不敬であると思いますがお許しを…」

と向き直り下を見ながら言う

メナス「そのようなことでありましたら許しますうよ」

レン「嘘です!目のやり場に困ったので、後ろ向きしました!ごめんなさい!てかあれつけてないの?わざとか?!わざとなのか?!」

セトラはレンの横に行くとき小声で

セトラ「まあ…正常な反応だよ レンのあんちゃん」

レン「ありがとよ…(嫌な予感 クリスここは適当にはぐらかして

撤回するぞ)」

とアイコンタクトをとる

クリス「(わかった じゃあそうするわね)」

レン「では、私達はこのへんで…」

メナス「…獅子の皮を着た狩悪魔(バルバトス)…でしたけ」

レンは足を止める

レン「…いいえ…私は違います…」

メナス「いいえ魔女様をそうおっしやいました」

レン「(あいつか!いや…まさか…この女をあ魔女が生き返らせ  
たでも言うのか!?)…俺にどうしろとおっしやるのですか?」

メナス「私の目的はアマラ王国の再興 それにあなたの力を貸して  
もらいたいんです」

レン「断る!」

レンは立ち上がる

レン「国に関わるなんざ御免被る」

セトラ「お嬢やめとけ」

メナス「なぜですか?セトラ」

セトラ「このあんちゃんは国に取り殺されたような男なんだ…そん  
な男に国の再興を、手伝わせるなんて、あんちゃんが可哀想すぎる」

レン「…」

セトラ「お嬢にとつちや臣下が裏切ったようにあんちゃんは国に裏  
切られたんだぜ?」

レン「おまえ…なんでそれを…」

セトラ「あんちゃんの頭の中くらいわかるぜ」

レン「それはそれは気をつけないとな…」

と笑うとその場にあぐらをかくと、ポケットから煙管型の吸引器を  
出し薬を吸う

レン「そろそろ夜だ…ここで飯としようかのう セトラ クリスそ  
この嬢ちゃんもめしくうか?」

と少しおじさん口調で言う

セトラ「お前さん実はすごいとし取ってるだろ?」

レン「まあ…それはいいんだよ」

セトラ「クリスの嬢ちゃんいいののか?」

クリス「まあ…レンはいろいろと規格外なところあるからねえ」

そう言って呆れた笑みをうかべる

レン「わかったお前だけシチュー抜きな!」

クリス「ひどい!」

ガスコンロと食材をつかい鶏肉のシチューをいつの間にか作っている

レンはシチューを器についてクリス セトラにわたした

レン「あいよ食べ食べ」

クリス「レンのアイテムボックスで、便利だね」

セトラ「それにしてもこれ上手いな」

お世辞にも可愛いと言い難い…猫の杖がシチューをがつつくなんともまあシユールな絵面が…

レン「おいメナス嬢食わねえのか？」

と階段を登った上の玉座にいるメナスは

メナス「供物は持つてきてください」

レン「働かざる者食うべからずだ 欲しけりや動いてこい！」

メナスは頬を膨らませる

レン「セトラ悪いなこればかりは譲れないんだ」

セトラ「お前さんの考え方はごもつともだから、お嬢降りこい！」

メナスは不機嫌そうな顔をして

レン「ほら肉多めにしてやったから機嫌直せ」

とシチューの入ってる器を奪い取るように取りそれを口に運ぶ

メナス「！」

セトラ「どうだ？」

メナス「悪くないですね」

レン「そうか？」

と笑う

メナス「いつぶりでしょうか…誰かとこうして夕餉を囲むのは…本当は信じたくなくなりましたよ…」

レン「？」

メナス「セトラからきました…国が滅んだことも永遠に続くと思われた我がアマラ王国の栄光は今やどこにないことも」

レン「…はあ…俺さあ…昔全部捨てたことがあるんだ…そしてこいつ（ガンブレード）一本に心血を注いだ、そして無敵とまで謳われた…だが、その先には何も…なかった…結局何もなかった…そして俺は

国に勧誘され国の犬になったそこにもなにもない：その後国の作った孤児院の役員になり先生になった：俺は孤児院の子達の成長を見続けた成長して巣立っていく、その時やっときづいた俺の生きた証があったことに、だから俺は孤児院を続けたそしてそいつらを守るために人を殺し続けた：でも結局：俺は…」

とコップに入ったお茶を覗き込んだ：

レン「俺は…信じ続けてきたもんに殺されてしまった：滑稽な話さ過ぎた人間は結局腫れ物扱いされ爪弾きにされる…」

と笑う

クリス「…レン…」

レン「でもいいだ 俺の生きた証はまだ：生きているそしてまたそれが俺の生きた証が別のものを生かしてまた、俺の生きた証は増えてそして広がっていく：無駄なことだと思っていたことが、この手一杯に欲しかったものができた出たんだ俺の生きた証は今でもこの手から溢れるくらいに溢れ続けているんだよ。俺は一度死んだ：だが、悔いなんてない お嬢：お前が生き返ったことこそが…、その国があつた証じゃないのか？」

メナス「！私が…」

レンは笑う

レン「さあ…お後がよろしいようで、昔話はこの辺して、食うべえ」と鍋からシチューを注ぐとそれを頬張る

翌朝

クリス「おはよう：レン」

レン「お目覚めか：宮殿のそと見てみるよ：そつとだぞ」

クリスが宮殿の外を見ると多数の融合モンスターがいた：

レン「囲まれた感じだな…」

クリス「なんでまた…」

レン「一つおかしい点がある。俺は最初彼奴等をここの守護者と考えたのだが…今朝奴らの一体を解剖した」

クリス「解剖?!」

レン「そうしたら色素配列とメナスの色素配列を調べたら一致：ア



マラ人だった：それに嗅覚が優れていることもわかった」

クリス「なるほど：セトラを消化しなかったわけだ」

レン「おそらくだが、あの融合モンスターはずっといたことになる  
：彼女：メナスの棺のある宮殿になぜアイツラがいる？まるで、メナスが生き返ることが予想されてたみたいだ：」

クリス「たしかに：おかしい」

メナス「やっぱりあの怪物共は臣民なのですね：」

と暗い表情をする

レン「：メナス様：介錯任私が：請け負います：」

とレンはメナスに膝をつき言う

クリス「レン：：無茶だよ」

レン「無茶でも、殺らなきや殺られる：：それに：いい加減に解放させ  
せてやりてえからな：」

メナス「レン・ヴァーフアイト：臣民の介錯の任を命じます」

レン「謹んで承ります」

レンは宮殿遺跡の入口の階段を降りる。無数にいる融合モンスターであるアマラ人はこちらを見るとレン目掛け襲いかかる

レン「俺は：：獅子の皮を被った狩悪魔（バルバトス）」だ：」

すると髪の毛が一気に白髪になる。そうして地面にガンブレードをさす

レン「それじゃあ：：いきますか：」

そうレンは踏み出した瞬間消える

メナス「（：消えた?!）」

次の瞬間周りにしたアマラ人が一斉に凍りつく

レン「痛みは感じないようにしてやるから：：安心しろ：」

とトリガーを六回引く

レン「天上天下唯我独尊：プラステイングドライブ：」

氷属性の極大威力遠距離効果のある大技を目にも止まらない速さで連射する。

レン「安らかに眠れ：おまえたちの無念俺が全部：引き受ける：」  
そうして改造人間にされたアマラ人を全員殺しおえると

クリス「お疲れさまレン」

レン「…」

メナス「大義でしたよ…レンさん」

レン「まだだ…」

レンはそのまま近くにあつた倒れた石柱を担ぐとそれを地面に深々と刺す。レンはミスリル製のナイフで意思に文字をほる

アマラ人慰霊碑

と刻む

レン「せめて…その魂に安らぎを…」

レンは目の前にガンブレードを地面に指すと膝をつき頭を下げる

レン「これでいい…行くぞ…クリス」

と眼の前のガンブレードを抜く

レン「ギルドへは報告書を提出しておこう」

クリス「そうしようか…」

レン「で、メナスさんや君はどうするつもりで？」

メナス「私はレンさんについてきますよ」

レン「は？いや…普通ならクリスだろ」

メナス「貴方は私の臣下なんですから」

レン「なんか、勝手に臣下にされてませんか?！」

メナス「先程私の前にひれ伏したじやありませんか」

レン「あ…」

と膝から崩れ落ちる

セトラ「まさか…兄ちゃん…」

レン「勢いでやつちまったあああああー！」

メナス「ということだ あなたは今私の近衛隊長にですから」

レン「そんな…ええ…」

スキル 「獅子の皮を被った狩悪魔(バルバトス)」を習得しました。

効果 自身を含めた仲間が圧倒的不利にあった場合すべてのス

テータスが30%上昇

称号 「女王の騎士」と「女王の下僕」を取得しました。

レン「(「ひびくふふふ」)「ひびく口だろ…」」

## No. 7 ポーション騒動

あれから3ヶ月たった

メナスが家に来たとき格好が格好だったから色々問題なったから、服を買って現在どこにでもある格好にさせている冠と胸につけていた飾りは外しています。ちゃんとした服装をしています

メナス「で、どうなりましたかあくアマラ王国の報告書は」

レン「とりあえず メナス女王が国と運命をともしたという文は否定を出した 痕跡の証拠をすべて王都の考古学部門に一連の報告書を提出しておいたあとはアイツラ次第だな」

クリス「ひっくり返されないかな？」

レン「現地には証拠が馬鹿みたいにあるだ、アホじゃない限りわかるはずだ」

クリス「うまくいくかなあ」

レン「うまいくようにこういうことを報告してやった」

そういつて報告書の写しを渡す

メナス女王の遺体があると言われた棺には、遺体があったとされる痕跡はなく、史実通りに丁重に埋葬したとあるがそのような事実はなかった

クリス「なるほど」

レン「それにこちらの史実にはおかしな不自然な点がいくつか見受けられたそこついてやったから、認めざる得ないだろう あとギルマストとセトラが向こうに行ってるからひっくり返されることは…無いだろう…」

そう言っ立ち上がるとの書齋の窓から外をみる

レン「さて…クリス少し出てくるぞ」

クリス「?どこに行くの？」

レン「カズマの稽古だ」

高原にて

カズマ「カー君！リフレク！」

と魔法のバリアをはる

レン「だいぶ慣れたな」

カズマ「はい お陰様で！」

レン「お前みたいな弟子か親友または息子いたらな、出来の良さに誇らしいく思えるぜ」

カズマ「そんな照れるぜ！」

レン「本当さね…そのうち俺のこのガンブレード、お前に託そうとも思っちゃまうぜ」

カズマ「え！そのめちやつよ剣をですか?!」

レン「ああ…ああでもこれ使えるのに20年かかったからなあ…今度お前にあったガンブレードを試作してみるとしよう」

カズマ「レンさんがいてよかったぜ！」

レン「生き抜くために教えてんだ。これをお前がまた…そのすべて誰かに教えてやってくれよ」

とレンは笑うそういつて竹で作った水筒を渡す

カズマ「そういえば…レンさんデリバリーサービス始めたんだな」

レン「ん？ああでもまあ…と言つても何でも屋なんだけどな、剣術や戦闘面の指南も範疇に入れてる」

カズマ「すごいですね」

レン「とりあえずこの世界で生きてくんだ食い扶持くらいはさ…内にあのわがままお嬢様いるし…」

レンは遠い目をする

カズマ「あ…（察し）」

そうしてレンは家へ戻る。レンの家は一回に事務所を起き2階部に自宅スペースをおいている。が、レンはほとんど事務所にいる

レン「職業病か…はあ…」

そのため息をつき首を鳴らし、そして目の前にあった本を、よむ  
レン「なにになに？誰でもできるポーションの作り方？」

1 薬草とはちみつを混ぜ、解熱剤を作る

2 解熱剤に秘薬を混ぜ練成版を用いて解熱剤の色透明に変わるまで魔力を注ぐ

3、完成

注意 魔力の注ぎ具合によってはハイポーションが完成する場合と質の悪いポーションができる場合がある

レン「まあ…そうだろうな とりあえず作ってみるか…」  
とりあえず作ってみたが、

レン「なんか透明度が高すぎるような…」

カズマ「あれ？レンさん何してんすか？」

レン「おおカズマ…ポーションを錬成したんだが…失敗したかもしれないのだ…」

カズマが、五つのビーカーに入ったポーションを見る

カズマ「これ…ポーションなんすか？なんか水みたいすけど」

レン「俺もそう思ったんだが…鑑定士に見え貰えば一番なのだがなあ…あ…いいやつがいたわ」

ということでクリス召喚

クリス「これ…ポーション…なんだよね？」

レン「そのつもりで作ったんだが…どう見ても水にしか見えないよな？」

クリス「うくん 一つ可能性があるとしたら、ハイポーションより上の階級のやつを作っちゃたんじゃないの？」

レンとカズマ「は？」

クリス「だって、レンの魔力は底なしなんだよ？」

レン「…うなことないだろ」

クリス「じゃあなんであのバイクに乗れてるの？あれ…魔力を添加して走ってるんでしょ？これは予想だけどレンはバイクに乗ってるうちに魔力の操作とかそのへんが鍛えられたんじゃないかな」

レン「そんなことが…あんのか？」

クリス「うん 普通にあるよ多分これはレン自身がそう言う鍛錬癖がある身体であることが要因にもあると思うよ、それよりもこの…水みたいなポーションは何かだのね」

レン「実験体がいいのかいるが…あいつ（ダクネス）にここに来てほしくは無い…」

クリス「じゃあどうするの？」

レン「取り敢えず、ギルドに依頼申請してくるわ」

依頼申請を出し店へ戻るそして…に3日後、ギルドを通じて手紙が届くが手紙の封筒に書かれていたのは…王家の紋章が刻印されていた、レンはすぐにクリスとカズマを呼び出す

カズマ「国から…」

レン「ああ…」

クリス「レン何したの?!」

レン「俺に聞くなよ!」

三人は息を呑み手紙の封筒を開ける

レン「…この度…レン・ヴァーファイト殿の生成したポーションは極めて高品質に加え、使用者に身体能力上昇とその他不明の上昇効果が見られた。その為王家で貴公の作製したポーションを買い取らせていただいただあ?!」

カズマ「王家が買い取る?!」

クリス「まだ続きがある?」

カズマ「え なになに…これらのポーションは王国的な力に多大なる増強効果が見られることから…5億エリスを支払い、貴公に与える、て…」

カズマとレンは目をギョツとして顔を見合わせる

カズマ&レン「まじかああああああああああ!!!」

カズマ「え?!え?!5お…」

レンはカズマの口を塞ぐと一同店の扉を開け外を見渡しは人が聞いていることを確認し、開店中の札を臨時休業の札に変える

カズマ「どうするよ!レンさん!5お…だぜ?!」

レン「放棄したいけど…これも来てるからなあ」

と5億エリスと書かれた小切手を見せる

レン「とりあえず…この小切手は…そうだ!お前ら!これ分けるぞ!」

カズマ&クリス「え?!」

レン「二人に1億ずつ渡す」

クリス「なんで?!」

レン「そのほうが後腐れなくていいからだよ！いいか?!お前ら！これは俺たち3人だけの秘密だ?!」

カズマ「口止め料でことか?」

レン「そう捉えたかったらそうしろ！いいかこれはあのバカ3人もバレちゃいけねえ、もちろん他の部署のやらにもだ」

クリス「わかった!」

カズマ「り…了解!」

後日、金を受け取った店にいたクリスに渡した。カズマの、分は分けて保管している

カズマ「アイツラには…黙つとかねえと…」

レン「必要分だけその都度取りに来るといいさ、君の分は嚴重に保管してるから、あとこれうちに置いとくから」

と言ってダイヤル式の金庫を見せる。

レン「パスワードは絶対忘れないこと！いいね!」

カズマ「お 押忍!」

するとメナスが現れレンの金庫を勝手に開けると買い物へ向かっていった

レン「…一応…バレるとああなるからな?」

カズマ「は…はい…」

レンは秒でバレた…